ＡＩによる「江の島紀行」現代語訳

（基本的にＡＩが作成した現代語訳文であるが、赤字は検討が必要と思われる部分）

第一日　江戸八丁堀～川崎～神奈川宿

鎌倉の鶴岡八幡宮や江の島への参詣は、これまで何年にもわたって思い続けてきたことだった。しかし、世の中の用事が絶えず多く、また道のりも少々遠いため、心に思っていても実行には移せなかった。けれども今年ばかりは何の障りもなく、四月十八日の夜明けに旅立つことができた。空模様は実に穏やかである。

ねぎ事の　年を重ねて　夏衣　　今日思い立つ　旅ぞ涼しき

（願掛けして年月を重ねてきたが、今日こうして夏衣をまとい旅に出られるのは、まことに涼やかである。）

高輪でしばらく休む。東海寺や海晏寺の紅葉を、過ぎし秋に見た記憶がよみがえり、その面影がしのばれる。今は青葉が茂る姿を見てみたい思いもあったが、先を急ぐ旅であるため、立ち寄ることもせず、鮫洲や新井の崎も通り過ぎる。

大森にある梅園でひととき遊び、六郷の渡し舟もたいそう穏やかに渡ることができた。川崎にある「萬年屋」という店に立ち寄って昼食をとり、それから神奈川の「井桝屋」という宿に着いた。

今夜はここに泊まることにし、その後、宿の向かいにある権現山に登ってみた。

眼下遥かに海が広がり、野毛や本牧のあたりが見渡せた。夕食の支度であろう煙が心細く立ちのぼっており、後ろを振り返れば、田畑もまた一つの趣を添えている。やがて日も西に傾いたので、宿へ戻った。

第二日　神奈川～関～能見堂～金沢

十九日、晴れ。辰の刻（午前八時ごろ）近くに宿を出発し、まずは台の茶店を過ぎて、浅間神社に参詣する。富士山の「人穴」と呼ばれるものもあり、珍しいものだと思った。

程ヶ谷から金沢に向かう道は曲がりくねっており、「関」と呼ばれる立場で一休みする。その後、山道や坂道といった険しい道を越えて、能見堂に到着した。

この場所の景色は筆にも描ききれぬほどであり、昔、絵師・巨勢金岡がここで筆を捨てたという話も、なるほどもっともだと感じた。ここには「筆捨松」と呼ばれる大きな松の木がある。
かつて心越禅師がこの地を訪れた際に、「この地は唐土の西湖の八景に似ている」として、八景の名前を付けられたという。この寺の額には、竹葉という人物の詩が記されており、その筆跡は今に残っている。

堂のそばには「三星」と呼ばれる亭（あずまや）があり、そこから一人の僧侶が現れて、「八景の景色をご覧なさい」と言って「遠眼鏡（とおめがね）」というものを貸してくれた。　これにたいへん興味を引かれて、しばらくこの地で休息し、それから再び出発する。

道すがら、「君がさき一葉の松」と呼ばれる松がある。これは、かつて頼朝公が植えられたものだという。さらに道が曲がりくねった先で、「瀬戸橋」のたもとにある「東屋」と呼ばれる旅館に到着した。今夜の宿泊地をここに定める。

そのあと、照手姫ゆかりの「ふすべ松」と呼ばれる松の根元に小さな社があったので参詣する。その近くから舟を出し、漁舟も連れて野島へ行き、夏島側の干潟に降り立つ。そこではハマグリをはじめ、いろいろな貝を拾うことができた。近くにいた子どもたちがやって来て、にこにこと楽しげに手伝ってくれる様子もまた面白かった。

やがて潮が満ちてくる頃合いになり、舟人たちがあわただしく声をあげるので、名残は尽きなかったが舟に乗り込んだ。子どもたちにはお菓子などを与え、漁舟に網を引かせながらともに入江へ帰る。

その途中、左手の山の上に「一覧亭」という場所が見えたので登ってみた。ここからの眺めはまことに素晴らしく、筆にも言葉にも尽くしがたい。南には遠く房総・上総の山々が見渡され、浦賀の崎、猿島、烏帽子島、夏島などが海の面に突き出して見える。東北の方を見れば、称名の寺、小泉のあたりがほのかに見える。乙友・平潟・野島・洲崎・瀬戸のあたりを見下ろし、また見返れば、内川の先に富士の白雪が遥かに望まれる。これを何にたとえようか、例えようもない。

いくら眺めても見飽きることはなく、やがて日は富士の峰に隠れ、黄昏が近づく。人々に勧められて山を下り、舟に乗り瀬戸の東屋に帰る。

旅館の二階から、①ご主人が遠眼鏡を取り出して、あちこちの景色を見せてくれた。
②宿で借りた遠眼鏡で、あちこちの景色を見た。
そのうちに日も暮れたので、灯火の明かりを頼りに風呂にはいる。

しばらくして、網で獲れた魚を並べ、望みのままに料理してくれるので、普段はあまり好まぬ酒だが、今夜は盃を重ねた。そうして寝床に入った。

第三日　金沢～鎌倉～長谷

二十日、晴れ。朝、旅の一行はそれぞれに支度を整え、辰の刻（午前八時頃）に宿を出発した。まず向かったのは瀬戸明神。これは源頼朝公が勧請された神社であるという。つづいて、琵琶島にある弁財天の社にも参詣する。こちらは政子御前の勧請によるものだという。境内には「蛇木（じゃぼく）」と呼ばれる独特な樹木が幾本も生えていた。

その後、金沢侯の陣営跡の前を通り、金龍院へと向かう。堂の傍らには大きな石があり、昔、三島明神をこの地に勧請したとき、どこからともなく白い幣（ぬさ）が飛来し、この石の上に立ったという。そのため、この石は「飛石」と呼ばれている。

そこからさらに登ると、一つの「ながめの亭」がある。昨日訪れた一覧亭とはまた違った趣の八景が広がっており、実に興味深い。

百千度（ももちたび）　見るとも飽かじ　金沢や　取り並べたる　八（やつ）の名所（などころ）

（いくら見ても飽きることのない金沢八景は、まさしく選び抜かれた名所である。）

そこから少し下ると「龍燈の松」があり、さらに坂を下って寺を出た。左手には塩場がある。

その後、田畑の中を進み、「朝比奈の切通し」にさしかかる。この場所は急な坂道で、右手には「鼻欠け地蔵」と呼ばれる石仏がある。ここが武蔵と相模の国境にあたる場所らしい。地蔵は弘法大師の作と伝わっている。

この峠でしばし休憩した後、また曲がりくねった道を進み、麦畑を抜ける。梶原氏の屋敷跡、頬焼き阿弥陀、泉水川を渡り、坂東第一番札所である杉本観音に参詣する。「哥（うた）の橋」を渡り、荏柄天神にも参詣した。

大塔の宮の土の牢がここから右の方にあるという。頼朝公の屋敷跡、今は畑になっている。その近く、大蔵幕府跡には町家が並んでいる。筋違橋や宝戒寺の前を通っていくと、北条氏や将軍頼経公の屋敷跡を経て、鶴岡八幡宮の三の鳥居前に到着した。

雪ノ下の大沢でしばし休憩し、案内人を伴って赤橋を通ると、池の左右に紅白の蓮池がある。右側には三つの島が浮かび、その中の一つに弁天の社がある。かつては四島あったが、義経公が屋島出陣の際、一島を切り崩したのだという。左側の白蓮池には今も四つの島が残り、池のまわりには松の木が並んでいる。

「二王門」は三棟構えで、二王像は運慶の作と伝わる。左には護摩堂があり、不動尊が安置されている。これは大山不動と同じ作だという。　昔、平家追討の祈願を文覚上人がこの堂で行ったところ、左の童子が青い牛に乗って現れ、降伏感応の証（あかし）だろうか、膝を折ったという。

（→五大明王のうち左の大威徳明王が乗っている水牛は祈祷が通じたのか、膝を折り曲げたという。）

正面には神楽殿、右手には大塔があり、五智菩薩が安置されている。同じ場所には鐘楼もあり、「臥龍柳」と呼ばれる古木もある。その風情は、まさに往古を思わせるものであった。

さらに右には「姫石大明神」と崇められる大石があり、これを祈ると腰から下の病が治るといわれる。

そこから右手の社地を出て畑の中を進むと寺がある。門前には「天正」の年号の御朱印札が建てられていた。本尊は十一面観音である。堂の前には、由比の長者が七か所に建てたという塔の一つがあり、その娘が七歳の時、鷲にさらわれ、鎌倉の町の七か所で血を落としたことを受けて建立されたものという。この長者は北条家六代の時代の人物らしい。

さらに坂を登ると、頼朝公の五輪塔がある。玉垣と鳥居は、寛永年間に薩摩の太守から寄進されたものだという。

右手の坂をさらに登って、大江広元・島津忠久の墓にも参詣する。再び八幡宮の社地に戻ると、右には薬師堂があり、神功皇后を勧請したとされている。

若宮八幡宮にも参詣する。この神社は仁徳天皇を祀ったもので、もとは由比ヶ浜にあったのをここに移したという。昔、頼朝公が静御前に法楽の舞を舞わせ、義経の行方を問うたのもこの社でのことだったという。

さらに経堂にも参詣した。ここには、唐の国から奉納された七千巻の経文が八角輪蔵に収められているという。

八幡宮の石段は幅が五間（約 9m）もあり、十間以上登る。左手の下には「隠れ銀杏」と呼ばれる大樹がある。かつて若宮の別当公暁が、伯父の実朝公をこの木陰から討ったという。これは北条義時の策略だったとも伝えられている。

石段を登ると右手には鶴亀石・影向石と呼ばれる三つの石があり、その先には六角堂がある。随身門もまた運慶の作と云う。朱に金銀を散りばめた社殿は、言葉に尽くせぬほど尊い。

万代（よろずよ）も　栄久しき　八幡山　仰ぐも崇し　神の広前

（万代までも栄えつづける八幡山を仰ぎ見れば、まことに神の威光が広がるようだ。）

回廊の中には、若宮神輿が四基、八幡宮神輿が三基安置されており、鎌倉将軍以来の宝物も数多く所蔵されている。

社を出て左には愛染明王が祀られており、続いて丸山稲荷に参詣する。この社は藤原鎌足が勧請

したものだという。坂を下ると頼朝公の御社があり、さらに下って十二院の惣門を出る。昔は二十五菩薩にちなんで二十五の院があったが、今では十二院に減ったとされる。

右手の小袋坂を登って青梅聖天に参詣する。近くには閻魔像があり、これも運慶の作と伝わる。
そこから山内に出て、鎌倉五山第一の建長寺に参詣する。表門の左手には、例の「長者の七塔」のうちの一塔がある。山門を入ると地蔵堂があり、「佐山地蔵」と呼ばれている。本堂の裏手、池の向かい側には大きな松の木があり、これは昔、若宮の御神体が垂れた場所であるという。

寺を出て「杉ヶ谷弁天」に参詣する。弘法大師の作と伝わる弁財天である。そこから遥かに洞門を出て右手へ進み、浄寿寺に向かう。これは足利尊氏公が建立した寺とされ、足利家十三代の墓があると聞くが、この日は拝観が許されなかった。

左手の遥か山の上には、冷泉為相卿の墓があるという。その山の麓には山内上杉家の屋敷があったが、今は「管領屋敷」の名だけが残り、すべて畑になっている。

右手には矢柄地蔵尊が立っており、これは権五郎景政の守り本尊とされる。そこを過ぎ、左手には最明寺時頼の墓があり、「松ヶ岡東慶寺」に参詣する。門前には「男子禁制」の札が立てられていた。

ここでしばらく休息していると、日光御山への例幣使が、今宵は鶴岡八幡宮に宿泊するということで、この道を通り過ぎていった。

それから鎌倉五山第二の円覚寺に参詣する。高台まで登ると「大鐘」があり、西洞和尚という人物が鋳造したという。本堂の本尊は釈迦如来で、天竺の羯磨（かっま）という仏師の作と伝えられている。

次に五山第四の浄智寺に参詣する。門の左手には、鎌倉五名水の一つ「甘露水」が湧いている。境内には豊川稲荷の御社もあり、北条時頼の建立とされる。この山をまっすぐ抜ければ近道であるというので、小笹を押し分けつつ細い山道を下り、麦畑を抜けて「化粧坂」に至り、「海蔵寺」に参詣する。

寺の奥には「弘法大師十六の井」と呼ばれる井戸があり、その道すがらには「千代の尾そこぬけの井」、また「景清の土の牢」などもあった。

源氏山を右に見て「英勝寺」を過ぎ、「扇ヶ谷の管領屋敷」に至る。源氏山は、かつて源義家が坂東の武士を集めた場所とされ、後に「白旗山」あるいは「源氏山」と呼ばれるようになったという。

そこから五山第三の「寿福寺」に参詣する。ここには実朝公の墓がある。墓は岩窟にあり、唐草模様の彫刻が施されている。この模様を実朝自身が描き彫ったというが、いささか信じがたいとも思える。坂の中腹には「長者の七塔」のうちのもう一塔があり、「岩屋堂」「浄見寺」の前を通って、若宮小路に至る。

　その道の右手には「人丸姫の塚」があり、麦畑の中に松が一本、目印のように立っている。遥か彼方には尊氏公の屋敷跡が見えるが、ここも今は畑になっている。

　雪ノ下の大沢に立ち寄るころには日が暮れた。灯火を頼りに段葛を進み、二の鳥居をくぐり、琵琶橋前から右に折れて長谷小路へと向かう。道の右手には、俳人・芭蕉翁の碑があり、また盛久が敷革の祈誓をした場所とも伝わる古い松の木もあった。こうして、日がとっぷり暮れた頃、長谷の「三ッ橋屋」という宿に着いた。今宵はここに泊まる。

第四日　長谷～江の島

二十一日、晴れ。辰の刻（午前八時）を過ぎるころ、宿を出て、まず光則寺に参詣する。

この寺には、日朗・日親両上人が捕らえられたという土牢がある。日蓮上人が龍ノ口で難に遭ったとき、四条金吾の兄弟もまたここで捕らわれたという。牢の前にある堂には、六体の像が安置されている。門を出て左手の山の頂には、山王社がある。

そこから深沢の「三仏」に参詣する。これは、かつて頼朝公が上総国の鋳物師・大野五郎右衛門に命じて鋳造させたものだという。堂は政子御前が寄進されたものと伝えられる。しかし、北条高時が滅びたころ、兵火のために堂は焼けてしまい、今は「濡れ仏」と呼ばれている。仏像の高さは五丈（約 15m）ほどあるという。

さらに、稲村ヶ崎を越えて長谷観音（長谷寺）に参詣する。本尊は三丈三尺（約 10m）の観世音で、春日大神の作と伝えられている。本堂の中には、東山義政公が納めたという楠製の手水鉢がある。右手には弘法大師作とされる大黒天の像もある。本堂から東南の方向を望むと、由比ヶ浜・三浦・三崎の果てまで一望できる。まことにすばらしい絶景である。坂の中腹には阿弥陀仏の像があり、これも頼朝公の寄進によるものという。

そこからさらに山坂を越えて、佐助稲荷に参詣する。この道はとくに険しい難所である。

いったん三ッ橋屋へ戻って昼食を済ませたあと、五霊神社に参詣する。この社は、権五郎景政を祀る神社であり、眼病に効く薬が授与されている。社内には「袂石」や「手玉石」などの霊石がある。また、名物として「力餅」が販売されている。さらに社内には「星の井」と呼ばれる清水があり、坂の上には虚空蔵菩薩を祀る堂がある。院内には多くの宝物が収められている。

その後、極楽寺坂を登って浄善寺と極楽寺に参詣する。境内には天正十八年（1590 年）の禁札（御朱印）が掲げられている。

そこを出て右手に進むと、「弁慶の腰掛け松」が見える。左手に穢多町を見て、坂を下ると日蓮上人の「袈裟掛け松」がある。その近くには「十一人塚」もある。

ほどなく、三軒並んだ支度茶屋を過ぎて、七里ヶ浜に出る。右手には横手ヶ原の古跡がある。
振り返ると、由比ヶ浜や袖ヶ浦に白い波が打ち寄せる光景が珍しい。　子どもたちが大勢で海に入り、さまざまな遊びに興じている。危なっかしいが、見ていて飽きない。そこから腰越村に入る。ここは彦根藩の所領であり、海岸には台場が築かれている。

満福寺に参詣する。ここには、義経が兄・頼朝に送った有名な「腰越状」が納められている。寺には住職がおらず、今は隣接する泉常寺に保管されており、そこで見ることができた。

その後、片瀬村の龍ノ口山に参詣する。院内には「光の松」と呼ばれる木があり、その洞には妙見大士が安置されている。左手には、日蓮上人の土牢と像が祀られている。本堂は「敷皮堂」と呼

ばれている。さらに左手には七面大明神の社がある。浜辺から海を望むと、風景は格別にすばらしい。門前には茶店が四～五軒ほどあり、そこから歩いてゆくと、真砂(まさご)のような白砂の道が続き、まるで雪を踏み分けているかのような気分になる。

渚に出て舟で渡り、江の島に上陸、「恵比寿屋」という宿に泊まることにした。　そこから坂を登ると中ほどに下の宮の別当所がある。そこから右手に「岩本院」、そしてさらに進んで「奥の院岩屋の別当所」がある。随身門の前には小さな池があり、傍らには「かえる石」と呼ばれる大きな石がある。

さらに坂を登ると三重塔があり、五智如来が安置されていると伝えられている。なお坂を登り続け、下の宮に参詣する。この宮は慈悲上人によって開かれたと伝えられる。

そこから左へ回って上の宮に参詣する。これは慈覚大師による開基と伝えられ、別当所がある。頂上には「金剛水」と呼ばれる清水が湧いている。その先には茶店が二、三軒あり、

遠眼鏡を架け、貝細工などを売っている。　（A案　客へのサービスで遠眼鏡を置いている。）

眼鏡をかけて貝細工などを売っいる。　　（B案　「遠」は間違いで、眼鏡をかけている。）

さらに原道を過ぎると一の鳥居がある。そばには「遊行上人の成就水」と呼ばれる井戸がある。この先の「山ふたつ」というところは、「地震知らず」という。里で地震があっても、ここはまったく揺れないという。

二、三の鳥居を過ぎて岩屋の本社に参詣する。本社の修理は終わっていたが、拝殿はいまだ未完成であった。左手には「亀石」と呼ばれ、自然に亀甲模様が現れている石がある。

そこから坂を下り、海岸に出る。この場所は「児ヶ淵」と呼ばれており、「龍燈の松」もある。さらに岩山を回って下り、「岩屋」に至る。この岩屋は奥行きが二町（約 220m）以上あるという。鳩が数多く洞内に巣をかけており、参詣者になじんでいる。

洞の中には「留守居の弁天」と呼ばれる神体があり、参詣者はそれぞれ松明を灯して奥へ進む。「弘法大師加持水」と呼ばれる清水も湧いている。さまざまな神仏が祀られており、奥の院は左右ともに「金胎両部」祀っているという。日蓮上人の「腰掛石」もあり、「無明の橋」を少し戻ると「胎内くぐり」と呼ばれる場所があり、その先には上人の「寝姿石」がある。

この岩屋は、かつて弘法大師が津村の湊から六字の名号を書いた板に乗ってこの地に来て開いたものと伝えられている。頼朝公が遊覧に訪れた際、海女たちに貝や魚を捕らせたことから、「魚飯石」や「まな板石」という名もあるという。ちょうど海女たちが集まっていたので、声をかけてみたところ、すぐに海に入って鮑やサザエを採ってきてくれた。

ここから右には伊豆の山々が、左には三崎の浦々が、そして沖合には大島までもが見える。まことに絶景である。

その後、元の坂を登って奥の弁天の前に戻り、脇道を通って夕方には宿に帰った。その夜は雨が降り出した。

第五日　江の島～藤沢宿～戸塚宿

二十二日。小雨が降ったり止んだりしている。けれども昨日見た海岸の風景が忘れがたく、辰の刻（午前八時すぎ）を過ぎたころ、ふたたび岩屋へ行くことにした。

まな板石の上、小高くなった場所に上がってみると、ちょうどそのとき雨がやんでいたので、しばらく海の面や磯に打ち寄せる波の様子を眺める。

昨日見たときよりも潮が高くなっていて、石の上まで残らず波が打ちかかる。その瞬間、まるで白妙の布の中に身を置くような心地がする。寄せ来る波は、まるで水晶でつくられているかのように透きとおって見え、岩の狭間に漲る波は、まさに千尋の滝が落ちてくるように砕けていた。

荒磯の　岩を打ち越す　波見れば
海の上にも　滝はあるなり
（海岸の岩を越えるような大波は、まるで海にも滝があるように見える）

この場所にしばらく立ち尽くしたが、いくら眺めても見飽きることがない。午の刻（正午）近くになり、名残は多いが帰途につくことにした。牛のような歩みで何度も名残を惜しみつつ、本宮の前から、上の宮を右に見て、下の宮の鳥居前に出る。そこで貝の細工物などを買い、恵比寿屋に立ち寄った後、江の島を離れる。このとき、再び小雨が降り出した。

渡し場を過ぎ、片瀬村の諏訪両社の前を通り、石上村の渡しを越えて藤沢の宿に到着した。

「みなと屋」という店で休息し、遊行寺に参詣する。開山は一遍上人であるという。仁王門をくぐって左手には方丈があり、右の坂を登ると小栗満重の堂がある。宝物もいろいろとあり、主従十一人の墓や照手姫の供養塔などもある。また、鬼鹿毛（おにかげ）という馬を馬頭観音として祀っており、その傍らにも碑が立てられていた。

そこを出て松原を過ぎ、戸塚に至る。道中では、鎌倉道との追分、長芋坂、焼餅坂などを通過し、武蔵と相模の国境の「境木」でひと休みする。

夜になって、程ヶ谷の並岡という場所で宿をとった。

第六日　保土ヶ谷～田町～八丁堀

二十三日、曇り。辰の刻（午前八時）を過ぎたころに宿を出て、神奈川の台（だい）でしばし休息する。

それから川崎を通り、六郷を無事に越えて、大森の「山本」という店で支度を整える。その後、品川を通り過ぎ、八つ山でまたひと休みした。

泉岳寺に参詣したあと、田町にある八幡の社にも詣で、夕暮れ時には無事に我が家、八丁堀の宿へ帰り着いた。

我が宿に　今日立ち帰る　旅衣　脱ぎあへぬ袖に　あまる嬉しさ

（我が家に今日帰ってきた。旅の衣を脱ぐ時も思わず微笑みがこぼれる嬉しさだ）

あとがき

　これは、旅の道中での思いつきの言葉や、その土地ならではの遊び・戯れごとなどを、いずれもありのままに書きとどめたものである。

　また、時代の記憶があやふやになるような出来事についても、道端の村人の語りや、案内人たちの言葉をそのままに記録した。これは、のちに振り返る折のよき思い出となるようにとの思いである。

跋文

　何年か前、李院君の「木曽道中旅日記」の巻末に私が跋文を書いたことがあったが、このたび、内君が江の島への旅日記を綴られ、その巻末にもまた私の跋文の依頼があった。

　その日記を拝見すると、名所ごとの和歌も添えられており、まるで目の前に景色が広がるかのようで、大変興味深く読ませていただいた。

　李院君は五七五の俳句や戯れ歌の滑稽味を旨とし、内君は風景をつぶさに記し、和歌を詠まれる。その対照的な姿は、夫婦がそれぞれの役目を果たすという仏の教えにかなっており、まことに睦まじい家庭の繁栄のあかしであろう。

　かつての縁により一度は跋文を記した私が、またこの巻の末尾に筆をとることになったのは、掉尾が整い心楽しく、老いや拙さも忘れて筆を走らせる次第である。

江の島紀行　要約

江戸八丁堀の町に暮らす私は、かねてより鎌倉の鶴岡八幡宮と江の島への旅を夢見ていた。しかし、年を経るごとに世の中の雑事は増え、道のりも遠く、思いを果たせぬまま幾年も過ぎてしまった。だが今年ばかりは、何の障りもなく、春たけなわの卯月八日、東の空が白みはじめる頃、私はついに旅立ちの時を迎えた。空はしんと澄み渡り、まるでこの旅を祝福するかのようだった。

高輪でしばし休み、東海寺や海晏寺の門前を通ると、かつて見た紅葉の面影が浮かんできた。青葉の繁る景色も見たい気はしたが、旅の先を急ぐ私は足を止めず、鮫洲、新井の崎を通り過ぎた。やがて大森の梅園に立ち寄り、六郷の渡しでは穏やかな川風に吹かれながら舟を渡る。

川崎では萬年屋という茶店で昼をとり、神奈川宿の井桝屋という宿に落ち着いた。宿の向かいには権現山がそびえ、私はそこに登って海を眺めた。夕餉の煙が本牧あたりに立ち昇り、背後に広がる田畑が夕日に染まって、まるで一枚の絵のようだった。

翌朝も晴れ渡り、私は浅間神社に参拝した後、曲がりくねった道を行き、関という立場で一息入れ、山坂を越えて能見堂に至った。そこからの眺望は、筆ではとても描き尽くせぬほどの絶景で、古の絵師・金岡が筆を捨てたという話も頷けた。

さらに金沢の瀬戸橋のほとりにある東屋に宿をとり、そこから舟を出して夏島の磯へ。干潟に降り立ち、貝を拾い、近くの子どもたちが笑顔で手伝ってくれた。潮が満ちてくる頃、私は名残を惜しみつつ舟に戻り、一覧亭からの絶景を堪能した。

三日目、朝比奈の切通しを越え鎌倉に入り、鶴岡八幡宮をはじめ、数々の寺社を巡り、建長寺、円覚寺、寿福寺など五山の禅刹にも参拝した。若宮大路の銀杏の下で頼朝と実朝の運命を想い、源氏の歴史が胸に迫る。夕方遅くなり暗くなったので、提灯の明かりを頼りに長谷道を行き、長谷の三橋屋に到着した。

四日目は長谷界隈を見て回った後、七里ヶ浜から抜けて江の島に渡り、弁財天の社に参り、岩屋を巡り、弘法大師や日蓮上人ゆかりの霊跡を歩く。潮騒の中、岩に砕ける波を見つめていると、心もまた洗われていくようだった。

五日目は、昨日印象の強かった稚児が渕へ行き、しばしの間、浪と岩の景色を眺め、昼頃江の島を離れ、片瀬、石上を経て藤沢宿についた。遊行寺に参拝し、東海道戸塚宿を経て保土ヶ谷宿の並岡という旅館に泊まった。

六日目、最終日は保土ヶ谷から神奈川を経て、泉岳寺、三田神宮に立ち寄った後、夕暮れに我が家へと帰り着いた。　旅衣の袖を脱ぎながら、思わず微笑みがこぼれる楽しい旅だった。

『江の島紀行』日程概要

	日付	区間	主な訪問地
1	第一日	江戸八丁堀〜川崎〜神奈川宿	高輪、東海寺、海晏寺、大森、六郷、川崎、神奈川、権現山
2	第二日	神奈川〜関〜能見堂〜金沢	浅間社、程ヶ谷、関、能見堂、筆捨松、八景、一覧亭
3	第三日	金沢〜鎌倉〜長谷	朝比奈切通、杉本観音、鶴岡八幡宮、若宮大路、建長寺、源氏山、寿福寺
4	第四日	長谷〜江の島	光則寺、稲村ヶ崎、長谷観音、佐助稲荷、五霊神社、極楽寺、江の島
5	第五日	江の島〜藤沢宿〜戸塚宿	江の島岩屋、片瀬、遊行寺、藤沢、戸塚
6	第六日	保土ヶ谷〜田町〜八丁堀	神奈川、川崎、六郷、大森、品川、泉岳寺、田町、八丁堀